

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 6月 10日現在

機関番号：32637
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520034
 研究課題名（和文） 共同行為の責任と倫理に関する学際的研究

研究課題名（英文） Interdisciplinary Study on Responsibility
 and Ethics of Joint Action

研究代表者

木村 正人（KIMURA, Masato）
 高千穂大学・人間科学部・准教授
 研究者番号：80409599

研究成果の概要（和文）：

分析哲学者を中心に昨今注目を集めている共同行為論の諸理論について紹介・検討し、さらに現象学、社会学理論等による知見を加えて、共同行為の構成要件、共同行為特有の意図性の諸原理、還元主義アプローチの当否、共同行為論における因果的解釈の射程などについて明らかにした。若手研究者を中心として組織された「行為論研究会」は学問分野を越える各学会等で注目を集め、一般公開の研究大会において報告されたその成果は、雑誌『行為論研究』にまとめられた。

研究成果の概要（英文）：

We have made clear the points of collective action theories developed by the analytic philosophy, phenomenology, and sociology, and discussed about requisite conditions for collective action, its peculiar principles of intention, validity of reductionism and causal theory, etc. Our discussions were opened to the public in the annual research colloquium, and now appear in the volumes of *Studies on Action Theories* (vol.1-2. Also the 3rd. volume will appear soon).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：哲学、社会学

科研費の分科・細目：哲学、倫理学、社会学、法哲学

キーワード：行為論、責任、倫理、分析哲学、現象学

1. 研究開始当初の背景

行為論は、哲学、倫理学、法哲学、社会学などの諸分野でそれぞれ基礎理論として扱われながら、分野間での連携や研究成果の共有がなされてこなかった。加えて方法論的な観点においても、分析哲学、メタ倫理、現象学それぞれが独自に行為論を展開しながら、術語の相違などもあって断絶があった。

こうした問題意識を共有する若手研究者が集い、(1) 出自を異にするこれら理論枠組みのあいだで対話を深めるために、まずは諸概念の共有と相互理解を図ること、(2) 分析哲学、メタ倫理、現象学のあいだを架橋するという本研究の課題にとって橋頭堡となりうる最近のいくつかの試みについて、

三者の立場から検討を深めること、(3)対話から得られた視点を、より応用的な課題に向けて展開するための射程を得ることを目標として、共同研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は、行為論にかかわる分析哲学、現象学、倫理学それぞれの最新の成果を通じて、これらのあいだに領域横断的な対話を深め、「共同行為の責任と倫理」をめぐる今日的課題について新たな展望を切り拓くことを目的とする。

3. 研究の方法

原則毎週開催の「行為論研究会」において文献検討および研究報告のための議論を行い、各年度末には一般公開の成果報告会を開催した。報告会で検討された原稿に加筆修正を加え、雑誌『行為論研究』を発刊した。

4. 研究の成果

英米圏を中心に議論されてきた共同行為論には、ふたつの中心課題がある。第一には、共同意図の解明であり、第二には、共同行為の成立要件をあきらかにすることである。代表的な諸理論の基本的な論理構成と枠組みは、(1)厳格な個人主義、(2)プラットマンに代表される個人的意図の連結によって共有意図を説明する立場、(3)共同行為を為そうという個人々の行為意図は共同意図から派生するとするトゥオメラ＝サル型、(4)ギルバートに代表される非還元主義などにわかれるが、大きくは行為意図について還元主義をとるか否かで分類することができる。

しかし、共同行為のタイプを、a)行為意図の主体、b)意図の様相、c)意図内容によって、分類した場合、それらすべての行為タイプをうまく説明する統一的な理論体系があるというよりは、それぞれの理論枠組みは異なるタイプの共同行為について特有の説明力をもっている。その意味ではこれらの説明モデルは単に対立しあうのみならず、互いに相補的な関係において捉えなおすことができる。

分析哲学を中心に展開されてきた従来の行為哲学は、単一行為者による比較的単純な行為に分析が限られてきた。そこで本研究が、社会学理論や現象学による知見を加え、共同行為論の諸理論を詳細に分析し紹介しえたこと、さらに諸モデルの位置づけを明らかにし、互いの弱点を補完するための視界をえたことは、大きな成果である。

またこうした議論の過程は研究代表・分担者のほか大学院生やポスドクを中心とした研究協力者、その他外部の若手研究者たちによって構成される一般公開の「行為論研究会」(毎月開催)において共有され従来の学問領域を超えた対話が積極的に行われた。また本研究のこうした成果は、一般公開の研究大会において報告され、議論に付された上で、雑誌『行為論研究』にまとめられてきた(一部Web公開中)。

初年度は、各分野における最新の動向のレビューと共有に主眼を置き、領域を超えた対話の基盤づくりに議論を割いた(『行為論研究』創刊号)。中間年度にあたる平成22年度は、分析哲学、現象学、社会学理論等によって従来検討されてきた共同行為論に関する諸論点を確認し、共同行為の構成要件、共同行為特有の意図性の諸原理、還元主義アプローチの当否、共同行為論における因果的解釈の射程などについて検討した(『行為論研究』第2号)。

研究最終年度にあたる平成23年度は、分析哲学、現象学、社会学理論等の諸分野にわたって検討してきたさまざまな共同行為論の論理構成、共有点と対立、その他諸課題について議論を重ねてきた。その成果は、行為論研究会編『行為論研究』第3号にまとめられる予定である(2012年夏頃刊行予定)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計20件)

- ①竹内聖一「〈自分らしく生きる〉とはどういうことなのか」『死生学研究』17、査読有、2012、93-111
- ②古田徹也「言葉の絵画性：デイヴィドソンのメタファー論再考」『人文科学研究』8、査読有、2012、1-12
- ③野矢茂樹「語りえぬものを、語ろうとしてみた」『本』36-8、査読無、2011、13-15
- ④葛屋博喜「ヒュームの因果論と神学批判」『思想』1052、査読有、2011、375-394
- ⑤古田徹也(2010)「言語の共同性と個別性の間：〈言葉の表情〉という観点から」『理想』第685号、理想社。
- ⑥古田徹也(2011)「知覚の概念主義の行方」『共生の現代哲学：門脇俊介記念論集』(UTCPブックレット18)、東京大学グローバルCOE共生のための国際哲学教育センター。
- ⑦池田喬(2010)「主観性への問いと反自然主義の可能性：今日の哲学状況におけるフッサール現象学の射程」『現象学年報』第26号、日本現象学会
- ⑧池田喬(2011)「生死の存在論から他者依存性の政治哲学へ：共生の哲学のために」『共生の現代哲学：門脇俊介記念論集』(UTCPブックレット18)、東京大学グローバルCOE共生のための国際哲学教育センター。
- ⑨Ikeda, T.(2011) "Agency and Mortality: Heidegger's Existential Analysis of Death and its Practical Philosophical Background," *Bulletin of Death and*

- ⑩八重樫徹 (2010) 「フッサールにおける〈真の自我〉：フライブルク期倫理学の再構成」、『現象学年報』第26号、北斗出版。
- ⑪萬屋博喜 (2011) 「ヒュームにおける自然法則と偶然的規則性の問題」、『イギリス哲学研究』第34号、日本イギリス哲学会。
- ⑫萬屋博喜 (2011) "The Principle of Double Effect and Moral Intuitions," Philosophical Studies XXXI, Department of Philosophy, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo.
- ⑬池田喬 (2009) 「行為論と存在論—初期ハイデガー哲学における交錯—」、『創文』第520号、創文社
- ⑭Furuta, T. (2009) "What is 'Human Nature'?: Wittgenstein's Treatment of Language Acquisition," Special Issue of the Annals of Ethics, pp. 79-92, Japanese Society for Ethics, 2009.
- ⑮吉川孝 (2009) 「生き方について哲学はどのように語るのか 現象学的還元の「動機問題」を再訪する」、『現代思想 総特集フッサール 現象学の深化と拡大』、青土社
- ⑯Yorozuya, H. (2009) "Causation and Agency," Philosophical Studies VII, Department of Philosophy, The University of Tokyo, 2009.
- ⑰早川正祐 (2009) 「ナラティブ・セラピーとケア」、『応用倫理・哲学論集』第4号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室 & グローバルCOE 『死生学の展開と組織化』

〔学会発表〕 (計42件)

- ①木村正人 「理由と因果の公共性：デューイとシュッツの行為論」、第103回公共哲学京都フォーラム、神戸ポートピアホテル、2011年6月11日
- ②吉川孝 (2010) 「実践理性としてのケア：感情の職業と労働のはざままで」、第6回「ケアの現象学」研究会、高知大学、2010年7月17日。
- ③吉川孝 (2010) 「フッサールにおける〈理念〉の問題：認識と行為のはざままで」、第32回日本現象学会大会ワークショップ「フッサールの超越論的観念論再考」提題、東京大学、2010年11月28日。

〔図書〕 (計9件)

- ①行為論研究会編 (古田徹也・竹内聖一・星川道人・萬屋博喜・八重樫徹・池田喬著) 『行為論研究』第2号、行為論研究会 (事務局 高千穂大学人間科学部・木村正人研究室) 2011、132
- ②池田喬 『ハイデガー 存在と行為：『存在と時間』の解釈と展開』創文社、2011、253
- ③野矢茂樹 『語りえぬものを語る』講談社、2011、483
- ④行為論研究会編 (野矢茂樹、木村正人、早川正祐、河島一郎、島村修平、竹内聖一、古田徹也、星川道人著) 『行為論研究』創刊号、行為論研究会 (事務局 早稲田大学文学学術院 木村正人研究室) 2010、142

〔その他〕

ホームページ等
<http://actiontheories.wordpress.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 正人 (KIMURA Masato)
高千穂大学・人間科学部・准教授
研究者番号：80409599

(2) 研究分担者

野矢 茂樹 (NOYA Shigeki)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：50198636

早川 正祐 (HAYAKAWA Seisuke)
上智大学大学院・哲学研究科・研究員
研究者番号：60587765

竹内 聖一 (TAKEUCHI Seiichi)
東京大学・文学部・研究員
研究者番号：00503864

吉川 孝 (YOSHIKAWA Takashi)
高知女子大学・文化学部・講師
研究者番号：20453219

(3) 研究協力者

古田 徹也 (FURUTA Tetsuya)
日本学術振興会特別研究員 (PD)

池田 喬 (IKEDA Takashi)
東京大学グローバル COE 共生のための国
際哲学教育センター・特任研究員

河島 一郎 (KAWASHIMA Ichiro)
東洋大学・理工学部・非常勤講師

星川 道人 (HOSHIKAWA Michito)
東京大学大学院・総合文化研究科・大学院
生 (博士課程)

島村 修平 (SHIMAMURA Shuhei)
日本学術振興会特別研究員 PD (日本大学)
日本大学文理学部人文科学研究所研究員

筒井 晴香 (TSUTSUI Haruka)
日本学術振興会特別研究員 PD (立教大学)

八重樫 徹 (YAEGASHI Toru)
東京大学大学院・人文社会系研究科・大学
院生 (博士課程)

萬屋 博喜 (YOROZUYA Hiroyuki)
東京大学大学院・人文社会系研究科・大学
院生 (博士課程)
日本学術振興会特別研究員 (DC2)